

巻 頭 言

鎮西学院大学 学長 姜 尚 中

鎮西学院は創立から140周年を迎え、大学も校名を変更し、学院との一体性をより鮮明にするに至っている。大学もカリキュラムや学科の編成など、時代の「必要」に向き合った改革の途上にある。そうしたなか、大学のファカルティメンバーの職責や役割、そのミッションや意識の改革も求められている。

「大学人」としての役割が、研究者と教育者そして「管理者」の三位一体から成り立っているとするなら、『紀要』は研究者としての大学人が、自ら取り組んでいる研究分野の知見やその成果を発表する学術的な媒体である。それは、本大学の学問的なストックとその水準のバロメーターであり、また研究者としての各教員の知的な関心と傾向を知ることが出来るガイダンスでもある。この意味で『紀要』は、「職業（召命）としての学問」(Wissenschaft als Beruf/Science as Vocation)が、本大学の研究者によってどのように受肉化されているのかを知ることが出来る最良の学術誌である。

ただ、人文・社会科学系のディシプリンを中心とする本大学の研究者を取り巻く環境は必ずしも芳しいとは言い難い。時代は「人文・社会科学不要論」とも捉えかねない傾向が勢いを増しつつあるからだ。そのキッカケとなったのは、2015年6月の文部科学省による国立大学人文・社会科学系の縮小方針の通知である。「教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については・・・組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする」という文科省の通知は、「人文・社会系学部廃止論」としてフレームアップされて人口に膾炙した点があるにせよ、国が「人文・社会科学軽視」と受け取られかねない通知を公にした衝撃は計り知れない。

そこには、「社会的要請」や「社会的有用性」といった基準が暗黙の前提になっている。こうした前提をより増幅させる「潜人的謬見」(イドラ)となっているのは、AI(人工知能)の知性が人間を超越するというシンギュラリティ(技術的特異点)仮説に代表されるような、情報社会の未来学的なヴィジョンである。確かに、AIの技術自体は確実に発展し、「インターネットに蓄積されたビッグデータを処理する専用AI群が連携して汎用AIのような‘人間=機械’複合系として機能する」(西垣通『AI原論』)ことになるかもしれない。しかし、天文学や地球物理学などの物質科学を別にすれば、われわれは世界そのものに直接アクセスするより、むしろ相互主観的に、主観の間の相互のコミュニケーションを通じて合意形成に携わっているのであり、特に人間社会の様々な判断には、主観性と客観性の相違が鮮明にならざるをえない。だからこそ、自由意志と責任といった人間社会に特有な問題が生じるのであり、人文・社会科学系の知はまさしくそうした領域とかかわっているのである。

AIのようなテクノロジーの進化に対する有用性が突出し、工学的な制度設計の領域だけが肥大化していけば、相互主観的に生成発展する人間社会の合意形成は、非人格的・没主観的な「システム統合」によって篡奪されていかざるをえない。それが、「生活世界の植民地化」(ユルゲン・ハーバーマス)に繋がり、生きる意味や「自立共生」(コンヴィヴィアリティ/イヴァン・イリイチ)といった価値をそぎ落としていくことになりかねない。こうした閉塞感の漂う社会にとって人文・社会科学の知見の存在意義は益々、高まっているのであり、本学術誌の意義もそこにあると思いたい。

今から110年程前、歌人の石川啄木は、時代の閉塞で窒息しそうな青年に向けた論説「時代閉塞の現状」(1910年)を、次のような言葉で締めくくっている。「時代に没頭しては時代を批評することができない。私の文学に求むところは批評である」。文学を人文・社会科学の知に置き換えてみれば、「批評」の力の再生こそが時代の「必要」とされているのではないだろうか。学問の客観性あるいは実証性と「批評」の力との緊張関係の中にこそ、現代において人文・社会科学的研究に携わる「大学人」の矜持があるに違いない。

